

滋賀の高校生が選んだ！

しがはいすくーるおすすめ本50選

(2018年度優秀作品)

(氏名の有無は本人の希望です) (著者名は50音順に並んでいます)

発行2019年10月

滋賀県教育委員会事務局生涯学習課



『残像に口紅を』

筒井 康隆 著
中央公論社

この物語の特徴は章が進むに連れて五十音の音が消えていく所だ。そして、消えた音を含んだものはこの世から消滅する。それは食べ物や動物だけでなく、人間もだ。物語が進むに連れて使えない言葉が増えていき、文章が不自由になっていく。それでも、読者に違和感を感じさせない作者の技術や語彙力に圧倒される。日本語の素晴らしさを感じる小説だ。言葉がほとんど消えたラストのスピード感は圧巻なので、ぜひ読んでもらいたい。

(近江兄弟社高校 2年生)

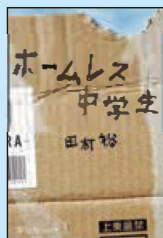


『かがみの孤城』

辻村 深月 著
ポプラ社

主人公の安西こころは、学校に行けない。五月のある日部屋にある鏡が虹色に光り、その先には大きなお城と狼の仮面を付けた少女、そして主人公と同じ学校に行けない子たち6人がいた。このお城で彼女たちはなんでも願いの叶う部屋のかぎを探すことに。読み進める度にわかっていく。自分たちがここに集められた理由が。何度読んでも感動する話が全てわかってからも楽しめる本です。

(国際情報高校1年 黒木 紗弥さん)



『ホームレス中学生』

田村 裕 著
幻冬舎

この本は芸人である麒麟の田村裕さんが中学生の時のホームレス生活を中心とした実体験の話です。中学2年生のある日突然、自宅のマンションは差し押さえになり、父親には「解散!」と宣言され、ホームレス状態に。そこからどんな生活を送ったのか。普段何不自由な生活を送っているありがたさや周りの人への感謝の気持ちなど、この本を読んでもう一度、小さなことでも感謝する気持ちが大切だと気づかされる本です。

(守山高校1年 平井 花果さん)



『残像に口紅を』

筒井 康隆 著
中央公論社

この物語では五十音の日本語が徐々に小説の文面から消え、それと同時にその音が含まれているものや概念も消えていきます。つまり、物語側では、五十音やそれを含むものなどが消えていき、読み手側では、文面から徐々に五十音が消えていくのです。今までの小説では味わえない設定と、五十音が消えていく中での筒井康隆さんの語彙力の豊富さがとても素晴らしく、さいごまで目が離せない作品でした。日々使う言葉の大切さを学べます。

(国際情報高校1年 園田 萌絵さん)



『学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話』

坪田 信貴 著
KADOKAWA／角川文庫

この本は、学年でビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話。高校時代は悪いことばかりして校長先生に「人間のクズ」と呼ばれるほどだったさやかが塾で坪田先生と出会い、初めは勢いで慶應大学を目指す。そのことを父親や先生にバカにされいよいよ本気で勉強しはじめた。その結果さやかは慶應大学に合格。「ビリギャル」は夢のようなことでも努力すれば必ず叶うことを教えてくれる。是非読んでください。

(堅田高校 3年生)



『学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話』

坪田 信貴 著
KADOKAWA／角川文庫

学年ビリのギャルさやかちゃんが慶應大学を目指すために塾に通います。そこで出会う坪田先生との授業を受け、さやかちゃんの人生が変わっていきます。坪田先生の「ダメな人間などいない」という言葉に私も救われました。勉強の大切さ、家族の大切さ、友達大切さ、自分自身の大切さ、たくさんのことを伝えてくれる1冊でした。笑いあり涙ありの本当に素敵なお話です。

(水口高校 1年生)



『この闇と光』

服部 まゆみ 著
KADOKAWA／角川文庫

美しいドレスと豪華な食事、優しい父親が語ってくれる物語の数々……。盲目の王女レイアの生活は、何一つ不自由ないおだやかなものだった。しかし、王国で起こった暴動をきっかけに、彼女は全てを失ってしまう。謎の集団に拉致された彼女に知らされる本当の世界とは？

今まで信じていた全てが覆される衝撃。最後に迎える驚きの結末に、「レイア」は何を思うのか。

(守山高校 1年生)



『最後の医者は桜を見上げて君を想う』

二宮 敦人 著
TOブックス

もしも、突然、親や友達、ペットなどの、そばにすることがあたりまえとなっていた存在が、生死をさまよう事態になったらどうしますか。延命治療を勧めますか。それとも、勧めませんか。命の儚さを目の前にするからこそ、悩み苦しむ。そんな患者やその家族の葛藤、そして考え方が真逆な2人の医者を描いた作品です。患者たちは、どちらの医者の考えに納得し、死を迎えるのか。とても考えさせられ、引き込まれる、感動する小説です。

(守山高校1年 高橋 郁花さん)



『最後の医者は桜を見上げて君を想う』

二宮 敦人 著
TOブックス

この本の悩ましいところは、正反対の信念を持つ二人の医者が出会うのも正しいことを言っているように見えるところだ。諦めず最後まで病氣と闘うか、残された時間を大切に使うか…。「命を大切に」なんて簡単な言葉じゃ終われない。こんな幸せの形もあっていいんだ、そう思わせてくれる、優しい物語です。

(東大津高校2年 中道 菜月さん)



『ワンダー』

R.J.バラシオ 作
ほるぷ出版

顔に重度障害を持つオーガストは今まで学校に行けていなかったけれど、十歳で初めて行くことになる。顔の治療の跡が原因でいじめられるが、両親と姉の愛、また得意の理科で周囲の愛、尊敬を得て友達ができいく。しかし親友であるジャックの言った事が原因でオーガストが傷つき学校に行けなくなってしまう。二人は仲直りができるのでしょうか？オーガストと家族の忘れられない出来事がどんどんできるワンダーな心の旅の物語です。

(MIHO美学院中等教育学校4年 黄 紀茹さん)



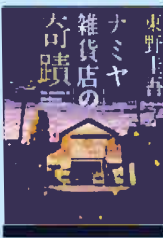
『素敵な日本人』

東野 圭吾 著
光文社

一人でも心温まる雑祭り、死の香りがする乾杯、家に伝わる不思議な水晶、どれも日常の近くにあると思えばあり、ないと思えばない、曖昧で不確かなそれらの物語。けれど確かなことが一つ。それはどれも優雅で、人間味にあふれているということ。

この本はそんな温かで、けれど冷たい、等身大の人間を、優美に描いた一冊。これを読めば少しだけ、未来や過去に向ける眼差しの彩りが増すかもしれない。

(甲西高校1年 鯉島 圭吾さん)



『ナミヤ雑貨店の奇蹟』

東野 圭吾 著
KADOKAWA／角川文庫

悩みを解決してくれると噂のナミヤ雑貨店を舞台に様々な人たちの想いや悩みが織り成す奇蹟のストーリー。読み終えた後パズルのピースが全てはまったような爽快感と同時に胸の奥がジワッとあたたかくなるような感覚を覚えることでしよう。とても読みやすい作品なので、ぜひ読んでみてください。

(東大津高校 1年生)



『人魚の眠る家』

東野 圭吾 著
幻冬舎

これは決して起きることのない少女の生と死についてのお話。静かに寝息をたてる彼女には、脳波がない。つまり彼女は脳死で法律上死んでいる。しかし彼女は人工呼吸器なしで息をし、手足を動かし笑う。娘の死を受け入れられない狂気と化した母親は周囲も驚愕の方法で娘を動かし続ける。また少女の従妹は大人たちの残酷な対応に苦しめられ、彼女自身も誰にも言えない秘密を抱える。仕事人間である父親の心境の動きにも目が離せない。

(守山高校 2年生)



『三日間の幸福』

三秋 隼 著
KADOKAWA／メディアワークス文庫

もし、自分の寿命を売れるとしたらそれはいくらになるだろうか。もし、あと3ヵ月しか生きられないとしたら何をするだろうか。この話の主人公は幼い頃思い描いていた人生とは違っている現実に落胆し、残り3ヶ月だけを残して自分の命を売ってしまう。寿命の最期を見届けるために派遣された監視員ミヤギと出会い、彼の残りの人生が動き始める。最後はおどろきと同時にどこか心があたたまるところまで。

(堅田高校 3年生)

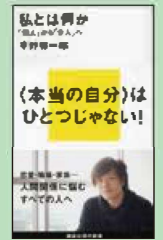


『川の深さは』

福井 晴敏 著
講談社

『川の深さは』は、福井晴敏さんの初めての作品です。葵と名乗る少女と、少女を守ることを自らの任務とする傷だらけの少年、増村と彼らをかかえた警備員、桃山との出会いから始まる推理パート、少年に任務を与えたのは誰なのか。少年のかつて所属していた機関、治安情報局とは何なのか。答えに近づくごとに激しさを増すアクションシーン、少年は任務を果たすことができたのか。リアルな描写と感動、この二つを兼ねた作品です。

(国際情報高校 1年生)



『私とは何か―「個人」から「分人」へ―』

平野 啓一郎 著
講談社

私たちは、場の状況、関係性によって、様々な「仮面をかぶり、キャラを演じ」ている。だが、その元には「ただ一つの本当の自分」があると考えている。しかし、場の状況によって使い分けている「キャラ」は、「個人」をさらに分けた「分人」であり、それはすべて「本当の自分」であるのだ。「本当の自分」を見つけることが必要になった現在、「分人」という新たな人間の単位を使うことで、世界の見え方が変わってくるだろう。

(守山高校1年 田中 陽一朗さん)



『フォルトウナの瞳』

百田 尚樹 著
新潮文庫

“死を前にした人が透けて見える”というフォルトウナの瞳を持った主人公の慎一郎。始め、その能力に惑わされるも、この能力を生かし、人の命を救おうとする。しかし人の命を助けると自分の命が削られることに気づき助けたくても助けられない現実と葛藤する。そんな中、慎一郎は葵という女性に会い心惹かれるが葵も透け始め…。自分の命が、他人の命が、慎一郎の下した決断とは。

(守山高校 2年生)



『告白』

湊 かなえ 著
双葉社

この本が作者のデビュー作と聞いたとき、衝撃はとても大きいでしょう。この作者はこの作品を書くまでにどれほどの人間を見て、普段私たちが目をそらしている自分や他人の本質をここまでリアルに書き上げたのでしょうか。子供を生徒に殺された教師、犯人の2人の男子中学生、その周りの人たち。日常の中では決して見せない悪意、ちっぽけなくせに高いプライド、殺意、それらを全て読み通した時にこの本の題名の意味が分かります。

(守山高校 3年生)



『豆の上で眠る』

湊 かなえ 著
新潮文庫

この本は、ある家族の姉妹を中心に描かれており、その家族に起こる事件をきっかけに姉妹の秘密が明かされていく物語です。犯人が誰かを考えたり、次に狙われている人物は誰かなどを推測しドキドキしながら本を読むことができます。全て読み終わって分かる最後の「本ものって、何ですか」というセリフに込められた物語の切なさ、重みを感じるとともに、家族という存在の大切さを考えなおすきっかけとなってほしいです。

(国際情報高校 1年生)



『スイッチを押すとき』

山田 悠介 著
KADOKAWA／角川文庫

この本の作者である山田悠介さんは、普段私たちが生きている現実社会では絶対にあり得ないストーリーから本を通して強く訴えるような作品を数多く書かれています。私が今回おすすめする「スイッチを押すとき」は、自殺するためのスイッチを子どもに持たせ監察実験させるという話です。想像もできない程の極限状態と生きようとする子供をリアルに描くことで、今の私たちがどれだけ平和なのか深く考えさせられる作品です。

(国際情報高校 1年生)



『置かれた場所で咲きなさい』

渡辺 和子 著
幻冬舎

「置かれた場所で咲きなさい。」この言葉は作者がある宣教師から手渡された英詩の一部です。その詩を通して、置かれたところこそが今の居場所であり、咲くということは、そこで笑顔で生きて周囲の人々も幸せにすること、咲けない時は、根を下へ下へとおろせば良いと告げられたということです。作者は、自らの体験をふまえ、キリスト教精神に基づき、四十のメッセージを読者の心に語りかけてくれています。読むと心が和らぐ本です。

(近江兄弟社高校 2年生)



『なぜ、それを好きになるのか?脳をその気にさせる錯覚の心理学』

竹内 龍人 著
KADOKAWA／角川新書

あの人が好き。あの色が好き。誰しも好きな何かがあると思います。しかし、「なぜ私たちは何かを好きになるのか」を考えたことはあるでしょうか。この本では「実験心理学」から好きという事についてまわっています。この本を読んで「好きという感情を芽生えさせる脳のメカニクス」が分かれば、それを対人関係、勉強などにも応用できます。そして、それがあなたの人生にとってプラスになることは間違いありません。

(守山高校1年 中野 翔貴さん)



『子ぎつねヘレンがのこしたもの』

竹田津 実 著
偕成社

この本は、普段接することがなかなか無い野生の動物との心温まる交流を描いた作品です。野生の動物とは小さなきつねヘレンのことです。ヘレンは、頭の怪我で視覚、嗅覚、聴覚を失なっていました。そんなヘレンを救おうとする少年や、少年によって心が変化していく周りの人達に少しウルッとさせられます。ヘレンが一生懸命生きようとすることによって、命の重さ、愛の深さなど、沢山考えることができます。ぜひ読んでほしいです。

(水口高校 1年生)



『8年越しの花嫁 ―キミの目が覚めたなら―』

中原 尚志・麻衣 著
主婦の友社

結婚まであと三ヶ月。幸せな夫婦に落とされた黒い影一。原因不明の病が妻に襲いかかった。心肺停止でいつ目覚めるか分からない妻を信じて待ち続け、毎日動画を撮り続けた夫。目覚めてからも、自分のことを覚えていない妻を側で支え続けた。そして8年越しの結婚。いろいろな障害を乗り越えて幸せを手に入れた。家族の愛。夫婦の愛。信じることの大切さ。人との関わり。人の温かさ。生きていく上で大切なことを教えてくれる一冊です。

(MIHO美学院中等教育学校 5年生)